

令和6年度 中学生の主張 in かながわ記録集



人生ってきっと、
ことばで紡がれている。

はじめに

国際児童年（1979年／昭和54年）を記念として始められ、今年で46回目を迎えた「中学生の主張 in かながわ」は、「少年の主張全国大会」の神奈川県大会として、すっかり定着しています。

本年度も熱意があふれ、手書きで温もりのある763作品の応募が集まりました。

9月29日に県立青少年センターで開催された発表大会では、「いかに生の感動を届けられるか」に重点を置き、会場には選出された発表者7名のほか、奨励賞受賞者10名、保護者、5名の審査員、スタッフ、一般の観覧者が入室して発表を見守りました。また、審査結果を待つ間のアトラクションについては、本年度は県立大磯高等学校SF研究部による「Student Filmを使った出張SHOW」を、受賞者参加型で行いました。そして、多くの方々のご協力により、発表大会は無事終了し、本県の代表として、横浜共立学園中学校・3年の菅井美結さんを全国大会に推薦することができました。

発表大会では、家族など身近な人への思いやりやマナー、社会貢献や伝統継承の素晴らしさを訴えるもの、スマホを中心とした生活習慣の見直し、多種多様な考えや人々の違いを受け入れることの大切さや体験活動の必要性、共食を通したコミュニケーションの大切さを訴えるものなど、様々な題材を、それぞれの生の声で個性豊かに表現していただきました。

応募作品の中には、学校生活や部活動に関する作品の他、昨年施行されたこども基本法にあるように、子どもの声を高らかに主張として挙げている傾向が見られました。校則の見直しや週休三日制・宿題や授業の改善・部活動の地域移行への賛否見直しなど学校生活に関するもの、政治や選挙・税金に対する考え、SNSを通した誹謗中傷や生成AIについて考えた作品、オリンピックや世界情勢を鑑みた平和や差別への意見、環境問題、ルッキズム、ジェンダーに関する内容も多くありましたことは、今年度の大きな特徴でした。

本記録集には、本年度の発表大会に選出された6作品と、奨励賞に選出された10作品を収録しています。この記録集を通して、中学生の純粋な想いを多くの方にお届けできれば幸いです。

最後になりましたが、本事業の実施にあたり、県内各中学校の関係者の方々をはじめ、ご応募いただいた中学生の皆さん、ご指導に当たられた先生方、そして、ご協力いただいた全ての方々に心から感謝を申し上げます。

令和7年1月

神奈川県立青少年センター
館長 山中 毅

「中学生の主張 in かながわ」発表大会の様子



最優秀賞（神奈川県知事賞）
菅井 美結さん



石川 心暖さん



青木 祐弥さん



津田 龍志さん



上野 夏芽さん



横山 菜月さん



副賞：ブックカバー



審査員の先生方



会場の様子



アトラクション（県立大磯高校 SF 研究部）



最優秀賞（神奈川県知事賞）受賞



講評（加藤審査員長）



優秀賞・奨励賞受賞者のみなさん

目次

◆はじめに	1
◆「中学生の主張 in かながわ」発表大会の様子	2
◆最優秀賞インタビュー（横浜共立学園中学校 3 年 菅井 美結さん）	5
◆作品集	
最優秀賞（神奈川県知事賞）	
書で伝える 菅井 美結 横浜共立学園中学校 3 年	6
優秀賞	
自分のできることをやればいい（神奈川県教育長賞） 小泉 光輝 平塚市立春日野中学校 3 年	
「思い出のダイニングテーブル」（神奈川県福祉子どもみらい局長賞） 石川 心暖 山北町立山北中学校 3 年	7
グラデーション社会（神奈川新聞社賞） 青木 祐弥 神奈川県立相模原中等教育学校 3 年	8
「失った時間の大切さ」（NHK横浜放送局長賞） 津田 龍志 山北町立山北中学校 3 年	9
思春期がおくる更年期の取扱い方（t v k かながわ MIRAI 賞） 上野 夏芽 神奈川県立相模原中等教育学校 3 年	10
夏休みの体験格差（神奈川県青少年育成アドバイザー連絡協議会会長賞） 横山 菜月 横浜共立学園中学校 3 年	11
奨励賞（神奈川県立青少年センター館長賞）（50 音順）	
しない後悔よりもする後悔 牛山 未彩 横浜共立学園中学校 3 年	12
相互尊重 木村 俊祐 慶應義塾普通部 2 年	13
「笑顔」のパワー 鈴木 萌々 神奈川県立相模原中等教育学校 3 年	14
「考える人」は、動かない 滝澤 咲歩 神奈川県立相模原中等教育学校 3 年	15
魔法修得のススメ 竹田 汐李 横浜市立義務教育学校霧が丘学園 9 年	16
今、自分が見ている景色 多那 晴都 茅ヶ崎市立松浪中学校 2 年	17
「吃音症と私」 馬場 紗季 山北町立山北中学校 3 年	18
努力の証明書 福澤 彩花 伊勢原市立中沢中学校 3 年	19
天も地も見つめたなら 前 あかり 平塚市立春日野中学校 3 年	20
「イメージ」の誤解をなくすには 牟 星田 横浜山手中華学校中学部 3 年	21
<参考>	
「中学生の主張 in かながわ」入賞候補作品一覧	22
「第 46 回少年の主張全国大会～わたしの主張 2024～」内閣総理大臣賞受賞作品 一隅を照らす ケイバジーバ 宮城県 栗原市立栗原南中学校 3 年	23
◆実施概要	24



横浜共立学園中学校 3 年 菅井 美結さん

—今回の作文を書いたきっかけを教えてください。

(菅井さん)私が学校で所属している書道部は、年々部員数が減ってきています。部員それぞれの個性を表すことができ、素晴らしい作品をつくりあげることができるのに、なぜ部員数が減ってしまうのか、とても疑問に思いました。だから、書道をすることで相手に伝えられることはどんなことなのかを文章にまとめ、多くの人に知ってもらえたらいいなと思い、このテーマで作文を書くことにしました。

—この主張をどんな人に届けたいですか。

(菅井さん)家の中でも、電車の中でもスマホなどに依存している現代人、また、機械やコンピュータ無しには成立しない、この世の中に生きている私自身にも、もう一度「書く」ことの良さを伝えたいです。

—今回の発表大会の参加を通して、これからどんな人生を作り上げていきたいですか。

(菅井さん)今回の発表大会に参加して、「物事を様々な異なる視点」から考察することの重要性について、改めて考えさせられました。主観も大切にしつつ、客観的に物事を思考することで、視野を広くした結論へと導くことができます。自分の主張をもつことと、周りの人の主張を聞くことのバランスをうまく保ち、そこから正しい結論を導くことができる、そんな人生を作り上げていきたいです。

(作文指導をしていただいた、横浜共立学園中学校国語科芹澤先生へ)

—学校ではどんなことに気をつけるよう、指導をしましたか。

(芹澤先生)自分の思いを形にできるよう、生徒の主体性を大事にして、書いてもらっています。

—毎年たくさんのご応募をいただいておりますが、学校でどのように取り組んでいますか。

(芹澤先生)自立の過程にある中学 3 年生という時期に、「自分の思いを形にする」という機会の一環として、取り組んでおります。夏休みの課題のひとつとして、3 年生全員に取り組んでもらっています。

ご協力いただき、ありがとうございました。

取材者 神奈川県立青少年センター指導者育成課職員

最優秀賞（神奈川県知事賞）

書で伝える

横浜共立学園中学校 3年 ^{すがい}菅井 ^{みゆ}美結



現代のコミュニケーションツールというとスマホやパソコンがあげられる。指一本で画面やキーボードを操作することで簡単にメッセージを送ることができる。なんて便利な世の中なのだろうと日々感心する。しかしその便利さにより、現代人の生活から遠ざかってしまったものにも目を向けたい。

書道部に所属している私は文字を「書く」機会が多くある。そして文化祭では毎年、見学に来た受験生に「必勝」「頑張れ」といった作品を書いて渡す。今年の夏も同じようにひたすら書いているとふと、あることを思い出した。それは去年の文化祭のことだ。

いつものように受験生に私が書いた作品を渡していると、ある保護者の方からこんなことを言われた。「娘は学校のマークがはいったグッズよりも、こういう在校生の温かい気持ちがこもった世界に一つだけのものが勉強のやる気になるそうです。」と。この言葉を思い出しはっとさせられた。

「気持ちがこもった」「世界に一つだけ」と思われるものとはどのようなものだろう。「必勝」や「頑張れ」といった言葉本来が持つ意味からだろうか。それとも、印刷される文字より人間味のある完璧ではない文字だからだろうか。

私の答えはどちらも「ノー」だ。おそらく、文字を書くときに思い浮かべる受験生達の顔や合格してほしいと願う気持ちが、筆をつたい、文字に表れ、世界に一つだけの作品となるからだろう。

手紙も「書く」ことで温かい気持ちを表現できる作品の一つだ。相手のことを思いながら、気持ちを込めて書く。喜んでもらうために絵を描いたり、色ペンで装飾をしたりする。最後に封筒を選び封をして、ポストまで行き、手紙を入れることで、やっと世界に一つだけの、永遠に残る作品を相手に送ることができる。手間暇はかかるが、この動作一つ一つの重みが、手紙の一文字一文字によく表れているだろう。そしてまた、それを受け取った人はその文字に触れ、鑑賞することで、まるでそこに手紙を書いた相手が実際にいるような気分になるだろう。

機械やコンピューターではどうだろうか。たしかにメッセージアプリでスタンプを送ったり、絵文字を送ったりすると「書く」よりもはるかに豪華な装飾ができる。

いろいろなフォントも使えるし、読みやすい。だが少し立ち止まって考えてみてほしい。それは相手の動作の重みを、気持ちを直接触れあって手から感じることもできる、永遠の作品になるだろうか。唯一無二の作品になるだろうか。

近年、デジタル化が進み、いつでもどこでも人とやり取りできるようになった。そのおかげで出来るようになったことがたくさんある。例えば、どんなに遠くにいても誕生日メッセージを送ることができるし、ちょっとした喜怒哀楽も一秒で伝えることができる。機械やコンピューターは私たちの日常生活をより豊かにしてくれた。だが、同時に「書く」ことの重要性が忘れられているように思う。だからこそ、もう一度「書く」ことで生まれる作品のよさを再認識してほしい。

コミュニケーション手段をすべて手書きにするべきだと主張しているわけではない。ただ、現代人には機械やコンピューターを使ったデジタルの作品と、「書く」ことで生まれる、永遠に記憶に残る作品を使い分けるスキルが必要だと思う。

これから効率性や利便性がより追求され、機械やコンピューターに頼る機会が増えていこう。だからこそ私は主張したい。「書く」ことでしか表現できない作品の良さを。機械にはだせない、気持ちのこもったその一文字一文字の温かみを。

心に永遠に残る、世界に一つだけの美しい作品を私はこれからも書いていきたい。

優秀賞（神奈川県福祉子どもみらい局長賞）

「思い出のダイニングテーブル」

山北町立山北中学校 3年 いしかわ このん 石川 心暖



最近、私は思う事がある。

「いただきます。」「ごちそうさまでした。」

このような挨拶を、家族全員そろって、あたり前のように交わしていたのは、いつの事だったのだろう。家族の顔をみて、その日にあった何気ない出来事や、日常の会話を、何のためらいもなく、話す事が出来ていたあの日は、遠い記憶の中で色褪せる一方なのだろうか。

父を筆頭に、家族で交わす食卓での会話を久しくしていない事に、違和感と寂寥の思いが募り、一気に私を思い出の空間へ連れ出した。今でも現役である、かつての中心的存在のダイニングテーブルは、今なお、家族一人一人を待っているかのように、寛大な趣を醸し出している。

父と母と、二人の兄と、「同じ場所」で、「同じ時間」に、「同じメニュー」を、このダイニングテーブルで、楽しみに食事を囲んだものだった。「今日ね、学校で先生と、友だちと、ボール遊びしたんだよ。」「給食で、おかわりして、全部クリアしたら、先生に褒められたんだ。」など、その日の出来事を、各自の日記のように、語り合ったものだった。

当時は、「家族」の中心的存在であった、とても大きなこのダイニングテーブルも、今では何となく小さくなったようにも思えるのは、単に私が成長して、大きくなったからだろうか。時間の経過と共に、必要性がなくなり、当時の活気も消えて広すぎるこのテーブルは、実は一番、家族に寄り添ってきてくれた味方だったのかもしれない。幼い頃に付けてしまった傷や、あやまって付けた油性ペンの書き跡も、家族の話題に、一役かってくれていた。

なぜ最近、このダイニングテーブルに集う事がなくなってしまったのだろう。それは、両親の仕事形態、兄たちの学校やアルバイト、私の通塾などで、各自の生活スタイルに年齢が上がるにつれ変わり、多様化した事も背景にあるようだ。

ある日、近年、社会的な問題となっている「孤食化」について、クローズアップしているニュースを観た。「孤食」とは、家族が不在の食卓で望んでいないのに一人で食事をする事で、国民の四人に一人が孤食状態となっている現状だ。原因は、高齢者の一人暮らし、一人親世帯、核家族世帯など世帯構造の変化が背景にある事に加え、家族の生活時間帯が夜型化し、「共食」する事が

難しいのだ。

また、孤食には隠れた問題点も多く、もたらす弊害もある。例えば、栄養バランスが崩れる事で、子どもの発育不足や、大人の生活習慣病リスクの増加につながる。とりわけ問題視されているのは、コミュニケーション能力が低くなりやすいという点だ。誰かと会話をする事で、相手の話を聞く力や協調性や社会性が養えなくなるそう

だ。
家族と一緒に食事をする事を通し、正しい食事のマナーや、箸の使い方を身に付ける事は、人とのコミュニケーションを基礎にして成り立っているのだ。

驚く事に、孤食同様に社会でフォーカスされている、「日本の子どもたちの貧困」も、問題視されていて、九人に一人が貧困な状態であるのも事実だ。理由は、低所得世帯による家計のひっ迫で、社会に隠れた「貧困の見えない部分」が浮きぼりにされた。

飽食な時代にもかかわらず、当たり前にごはんを食べられない現実があるなんて。そこで立ち上がり、救世主となったのが、「子ども食堂」である。栄養バランスが整った温かい食事と、人とのふれ合いがかなう、地域交流の場として全国に広がっている。

私は、そんな「子ども食堂」の役割や、生きた本質を学んでみたいと思い、近隣の子ども食堂でボランティア活動をさせて頂いた。

その施設は、子ども食堂と介護施設を担っていて、異世代交流に力を注いでいる。子どもの情操教育を育み、親からは得られない知識や経験を得る事が出来たり、高齢者は、子どもとの交流から生きがいや楽しみを感じ得る事が出来たりと、生きた教育を受けられるのだ。

私がボランティアを体験して印象に残った事は、「子ども食堂で共食して、笑って心が元気になってくれたら満足です。」と施設長が笑顔で話してくれた言葉だ。まだまだ認知度が低い子ども食堂を、広範囲に発信するべき課題が残されているが、一つずつクリア出来るよう、私が出来る事で、細く長く関わっていきたいと思った。

子ども食堂のシンボルとなっているその大きなテーブルは、子どもたちが共食によって得られた心の栄養を、明日への頑張るエネルギーに変える温かい食事に、彩りを添えてくれているようだった。

我が家のダイニングテーブルのように。

優秀賞（神奈川新聞社賞）

グラデーション社会

神奈川県立相模原中等教育学校 3年

あおき ゆうや
青木 祐弥



「なんか虹の色多くない？おかしいよ。」私の描いた絵を見た友達は、このようなことを言った。その後、少し言い争いになったことを覚えている。私が幼稚園に通っていたころのことだ。

思い返してみると、幼稚園児の私は八色の虹を描いていた。日本では、虹は七色で描くことが多い。そのため、友達の中には私の虹が間違っているように映ったのかもしれない。

けれども、空にかかった虹を見てみると、はっきりと七色に分かれているわけではない。もっとあいまいな、グラデーションになっていることがわかる。そこに色の境界線を引くことによって、私たちは虹を何色かに分けて認識している。実際、虹の色の数は国や地域によって異なるという。

つまり、「色の境界線」の引き方で、虹は八色にも二〇〇色にも、何色にもなり得るのだ。そして、その引き方は人それぞれである。どの引き方が正しいというわけでも、間違っているというわけでもない。

そう考えると、私たちが暮らしている社会は、実は「虹」のようなものである。多種多様な人々、そして考え方が広がっているのだ。それらが互いに補い合い、重なり合うことで成立している。「グラデーション社会」と言ってもいいだろう。

そういったあいまいな社会の全体を理解しようとするのはとても難しい。しかし、理解できないと不安になる。そこで、私たちは「色の境界線」を引くことで安心感を得ようとしてきた。人や考え方など、様々なものごとをいくつかのまとまりに分けたのだ。色をはっきりと分けた虹は、簡単に描くことができる。そうやって私たちは、この社会を「ある程度」理解し、生きやすくしてきたのである。

しかし最近では、SNS で民族や性別など、特定の集団に対する差別的な言動を見かけることが多い。「〇〇人はこうだから駄目だ」とか、「男はこう」「女はこう」といった投稿などだ。他にも、障がいや見た目など、「特定の集団」は様々である。それらはたいてい主語が大きく、過度に一般化されている。

この背景には、一人一人の心の奥底に潜む「偏見」がある。特定の集団をひとくくりにして、勝手な印象を持

ち、決めつけている。それぞれが引いた「色の境界線」を妄信してしまっているのだ。

これは、差別に限った話ではない。もっと細かな、日常の会話や考え方においてもみられる。たとえば、私は鉄道が好きであるが、自己紹介で「鉄道が好き」だと言うと相手の目が一瞬曇ることがある。どうしても、一部の過激な鉄道ファンのイメージが先行してしまい、「鉄道好き」全体に悪いイメージを持ってしまうのだ。だから、趣味の話になると私は少し躊躇してしまうことがある。このように、目につきやすい少数のイメージで「色の境界線」を引き、全体のイメージを固定してしまうことがあるのだ。

これはとても危険なことだ。自分が好きなものを「好き」だと言えない社会は、果たして生きやすい社会といえるのだろうか。

しかし、時には共通の「色の境界線」を引くことが必要になる。それが「ルール」である。一人一人がすべて違った境界線を自由に引いていても、社会が良い方向に向かうことはない。だが、ルールも絶対的なものではない。もちろん守らなければならないことには変わりはないが、時代によってその内容は変えていく必要があるし、実際に変わっていくのだ。

大切なのは、「色の境界線」を引くときにこの社会があいまいで、様々な境界線の引き方がある、ということ意識することだ。そして、そのあいまいさが社会を美しく、豊かにしているのだ。

だから、なにかを考えると、だれかと話すとき、思い出してほしい。この社会は「グラデーション社会」であり、様々な「色の境界線」の引き方があるのだと。

優秀賞（NHK 横浜放送局長賞）

「失った時間の大切さ」

山北町立山北中学校 3年 津田 龍志^{つだ りゅうし}



スマホの普及は、私たちの生活を一変させた。例を挙げると、多種多様な SNS の発達によって、一般人による情報の発信が容易になったことや、国内外のさまざまな人々との交流を深められるようになったことが分かりやすいだろう。

しかし、最近は多くの人がスマホに熱中しすぎるあまり、自分自身をコントロールできていないように私は感じる。一日中スマホをいじっている人、スマホを基準とした生活サイクルが回っている人。あなたの身の回りにもいるのではないだろうか。

総務省の令和五年度「情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査」では、二〇一四年に一時間二十四分だった平日のインターネット平均利用時間は、二〇二三年には三時間十四分となっていて、倍以上に増加している。年代別に見ると、特に十代の利用時間が大幅に増加していて、平日は四時間、休日は五時間をそれぞれ超えている。

さらに、文部科学省の令和六年度「全国学力・学習状況調査の概要」では、SNS や動画視聴の時間が一日あたり四時間以上の中学生は、三十分未満の中学生に比べて、学力調査の正答率に十パーセント以上の差がある。また、一日あたり三時間以上 SNS や動画視聴をする中学生は、三時間未満の中学生と比較すると、勉強時間が短く、毎日同じくらいの時間に寝ていないという傾向が見られる。

これらの結果から、若い世代のスマホの利用時間の増加は深刻な問題であるといえる。スマホの使いすぎは、視力の低下だけにとどまらず、夜遅くまでの使用による睡眠不足、勉強時間の減少にともなう学力の低下など、中学生の私たちにさまざまな悪影響を与えることが理解できただろう。私たちは、スマホの適切な使い方を身につける必要がある。

この作文を書いている、ふと思ったことがある。私もスマホに自分自身をコントロールされているのではないか、ということだ。スマホのスクリーンタイムを見返してみると、ほとんどの日で四時間を超えていた。中には六時間近く使用している日もあった。一日のおよそ四分の一をスマホに費やしているということになる。

私は、スマホに依存しているという意識がなかったの

で、こんなに使っていたのかという驚きとともに、自分を情けなく感じた。頻繁にスマホを気にしてしまい、つい誘惑に負けて開いてしまう自分が腹立たしかった。

このままではいけないと思った私は、思いきって夏休みの間、スマホの使用を徹底的に制限することにした。具体的には、学習目的以外でのスマホの使用時間を一日二時間以内に抑えようという計画だ。この計画を確実に実行するために、スマホに入れていたゲームアプリや SNS はすべて削除した。また、睡眠時間を確保するために、夜十一時以降はスマホを使わないように心がけた。

スマホを触っている時間が減ると、一日の中で暇な時間が増えた。ここで初めて私は、今まで多くの時間をスマホで無駄に消費してきたことを実感した。では、この時間を有効的に使うにはどうすればよいだろうか。私はあえて自分にプレッシャーをかけて、限られた時間の中で自分は追い込まれているという危機感を持ちながら、夏休みを過ごした。

これらの作戦が功を奏して、私は中学校生活で最後の夏を、受験勉強や文化祭の準備、部活の陸上の練習など、多くのことに積極的に取り組み、とても有意義な夏休みを送ることができた。

この経験を通して私が学んだのは、今やるべきことに優先順位をつけて、限りある時間を有効的に使うことだ。多くの人にとって、スマホは勉強やスポーツと比べて、重要ではないだろう。ただ便利で楽しいものに甘えてるだけで、自分で考えることをやめてしまえば、自分自身の成長にはつながらない。

普段、当たり前のようにスマホで浪費している時間の大切さに、あなたは気づけただろうか。失った時間は、もう取り戻すことはできない。だからといって、取り返しのつかないことを悔やんでいるだけでは何も生まれない。自分の生活態度を見直して、改善できるのであれば、実行に移してみよう。

これから先の長い人生の中で、大きな壁にぶつかることは必ずある。しかし、そのような時こそ焦らずに、辛抱強く努力することが大切だと私は考える。時間はいくらでもかけていい。自分の将来を決めるのは、自分しかいないのだから。

優秀賞（tvk かながわ MIRAI 賞）

思春期がおくる更年期の取扱い方

神奈川県立相模原中等教育学校 3年 うえの なつめ
上野 夏芽



「大きくなったらお父さんと結婚するの」こんな会話が電車を待っていた私の耳に入ってきた。五歳くらいの女の子とお父さんが仲睦まじく話している。

勿論、私にもこんな時期があった。だが、今はどうだろう。進路のこと、普段の生活のことで言い争うことが多くなり次第にお父さんやお母さんと最後まで平和に会話するのが難しくなっていた。特に中学校一年生の時、私は思春期、反抗期真っ只中でほぼ毎日親と喧嘩していた。そして毎回決まって「こっちは思春期なのだから少し心に余裕を持って接してくれ」と自己中心的なことを親に呟いていた。すると、母が「こっちは更年期なのだから気遣ってくれ」と言った。そこで私は、はっとしたのだ。気持ちが不安定なのは私だけではなく親も同じなのだ。できることなら会話をするたびに喧嘩するなんてことはしたくない。

そこでインターネットで思春期の子と更年期の親はどうやったら上手く接していけるのか調べてみた。結果として出てきたのは「思春期なのだから仕方ないと割り切って接する」や「余計なことは話さない」、「過干渉しない」などといった親目線からの接し方であった。一方、子供目線で更年期の親と上手く関わる方法というのは全くもって出てこなかった。そこで私は子供が更年期の親とどう接すればいいのか作文を通して主張することができれば様々な家で親子関係円満が達成できるのではないかと考えた。

まず、更年期とはホルモンバランスが不安定になってそれに伴い気分、情緒も不安定になることである。思春期も気持ちが不安定になる時期であるためこの二つは混ざる危険であり、ずっと一触即発状態である。ありのままの自分を出して喧嘩になるのなら、子供が、親が我慢すれば良いのではないかと思うがそれは良好な親子関係とは言えないのではないだろうか。お互いがなんの気兼ねもなく話せ、平和に過ごせることこそが思春期 VS 更年期の状況下において一番望ましい結果だと考える。

では、何をすれば両親と良い関係が築けるのだろう。家事を手伝う、いつも部屋をきれいにしておくなど考えたが、これではただの親の機嫌取りにしか過ぎない。そして、私達の本業は学業である。テスト前などになると家事をする時間などなくなってしまい、それと勉強への

焦りも相まって親と衝突してしまうに違いない。だんだんと何が最善策なのか分からなくなったので、母親にどう接するのが一番嬉しいかきいてみた。母曰く「手伝いとかじゃなくて、普段あなた（私）にしていることを当たり前と思わないで、感謝してほしい」とのことだった。確かによく考えてみれば血の繋がりがあっても所詮は他人なのにお弁当を作ってくれたり、塾に通わせてくれたり、送迎してくれたりなど親だからやってくれるのは当たり前と思っていたことに気付いた。

結論として更年期の親とうまく接していくために思春期の子供ができること。それは親が普段自分にしてくれていることは当たり前ではないことを理解し、しっかりと感謝を伝えることである。そして少し余裕が持てたのならその感謝を行動に移すことで親子ともに感謝し合える素晴らしい関係が構築されるのではないだろうか。思春期と更年期は嵐が過ぎるのを待つようにするしかないといわれるが、私はそういうときこそ感謝を伝え、後に振り返ったとき「あの時は力を合わせて乗り切ったよね」といえる、親子の絆を深める時期にしたいと思う。

夏休みの体験格差

横浜共立学園中学校 3年 ^{よこやま}横山 ^{なつき}菜月



私は今年の夏休み、部活動で学校に行った日はまず図書室に寄り、朝日新聞の天声人語を読むことにした。苦手な国語を少しでも克服するためだ。それを読むことに慣れてきたある日、衝撃的な記事を読んだ。8月1日の天声人語だった。夏休みを無くした方がいいという意見を知った。私はソフトボール部に所属している。夏休みは練習や試合で充実していたし、今年もこれから行く家族旅行にもわくわくしていた。だから夏休みが無くなるなんてとても考えられないと思った。

その記事には、体験格差について書かれていた。経済的な問題や家庭環境が理由で、旅行に行ったり、キャンプに行ったり、習い事をしたりと様々な事を体験できない子供がいる。夏休みの期間が長いことでそういう体験ができる子と、できない子の間の差が大きく広がる。それなら、夏休みの期間を短くするか、いっそ無くした方がいい。その記事を読んで夏休みは無くなって欲しくないが、一方でそのとおりだ、とも思った。私自身の今までの春休みや夏休み、冬休み等を思い出してみた。すると、だいたい毎回旅行に行ったり、海外のサマーキャンプに参加したりと色々な事を体験していた。何となく当たり前前、いつもの事と思ってしまっていた。でもそれができない人もいる事実気付いた。滅多にできないはずの体験を何度もできたことで、段々感謝の気持ちも無く当たり前と感じていく。それは怖いな、と思った。普段の生活にも言える。例えば、行きたい学校を受験して入学すること。皆ができる訳ではない。このことを忘れずに感謝しながら学校に通いたい。

部活動の先生や先輩も同じ様なことを言っていた。私達ソフトボール部は人工芝の広いグラウンドで、日々、顧問の先生の指導を受け活動している。私が入部する前は、長期間校庭整備中でテニスコートを他の部と共有して利用し、顧問の先生も頻繁には顔を出せなかったそうだった。先輩や先生は「今のこの環境は決して当たり前ではない。感謝しながら活動しよう。」と言っていた。このことを改めて実感した。

私は「部活動のために学校に通っている」と言っている程、ソフトボール部が大好きだ。夏休みには特に好きなノックがたくさん受けられる。チームの仲もぐっと深

まって、夏休みはチームも個人も大きく成長する。今年も「夏休みが永遠に続いたらいいのに」と何度も思った。

私の父は単身赴任をしている。父が長期休みには家族旅行を計画してくれる。そこで父と会えなかった時間を取り戻す位、遊んで食べておしゃべりをする。父との久々の再会はやはりとても嬉しい。私にとってこの家族旅行も夏休みの幸せな時間だ。

体験格差。体験できている子とできていない子の差は、今ははっきり目には見えない。でも私の経験からもその差は大きいと思う。だからこの問題を見過ごしてはいけない。私は今は楽しい経験をさせてもらっている立場だ。新聞の記事にはこの問題について、取り組んでいる団体があるとあった。また、困っている人がこの情報を知らない場合があると書かれていた。インターネットで調べてみると「子どもの体験格差解消プロジェクト」というものがあった。体験機会を子供達に提供する団体だ。きっと夏休みの体験はかけがえのないものになる。このような情報が困っている人の所に届いて欲しい。このホームページには、その団体のスタッフのことを「一生の思い出を届ける人」と書かれていた。とてもかっこいいと思った。中学生の私が困っている人達を直接助けることは難しい。私に今できる事は自分の環境や機会に感謝する事、部活動を楽しみながらも頑張る事、勉強等大変な時もあきらめない事だと思う。今年も大好きな夏休みはもう終わってしまうが、夏休み明けの学校や生活はありがとうで始めよう。私と一緒に最高の体験を作ってくれる両親等大人達は、きっと昔は与えてもらっていたのだろう。だから私も大人になったら、「一生の思い出を届ける人」になりたい。まずは大学生になったら、体験ができない子供達と一緒に素敵な思い出を作るお手伝いがしたいと思う。

しない後悔よりもする後悔

横浜共立学園中学校 3年 ^{うしやま}牛山 ^{みさ}未彩

私には、幼い頃から苦手なことがある。それは、「自分の意見を持続ける」ことだ。例えば、小学生のとき。クラスでAとBどちらが良いと思うか、手を挙げるように言われたことがあった。私は、Aが良いと思ったので、Aに手を挙げようとしていた。しかし、「Aが良いと思った人、手を挙げて下さい。」そう言われた時に、手を挙げた人が1人もいなかったのだ。私は、怖気づき、自分の決めた方ではないBに手を挙げてしまった。ささいなことだが、こんなことが何度かあった。「また自分が決めた方に手を挙げられなかった。」「今回は、少数だけど自分と同じ意見の人がいたのに手を挙げられなかった。」そんな後悔がどんどん思い浮かんだ。少数派に手を挙げるということは、まるでクラスの過半数を敵に回し、限りなく「孤独」に近づいているようでとても怖かった。だから、クラスで多数決をするたびに、「後悔」と「恐怖」という感情に押し潰されそうになった。そして、いつの間にか、「自分の意見を発表する」ことに苦手意識を持つようになっていた。

ある日、委員会でデザインの話し合いをしていたときのこと。①と②の案があり、その場の空気は、①の案で決まりそうになっていた。そんな中、ある先輩がみんなの前で

「私は②の案が良いと思います。」

と言い、理由を話し始めたのだ。周りの空気など気にせず、堂々と話す先輩を見て、驚き、尊敬すると同時に、自分が恥ずかしくなった。私は、自分の意見を話すどころか、多数決ですら、少数派に入ることを恐れる。しかし、この先輩は、最初から最後まで、自信を持って発表しているように見えた。そして、デザインは、①案になったのに、とても満足そうに笑っていたのだ。不思議でならなかった。

話し合いが終わると、その先輩に

「ああいう空気、意見言うのって怖くないですか。」そう聞いてみた。すると、その先輩は、

「緊張するけど、あとで言わなかったのを後悔したくないから。しない後悔よりもする後悔だよ。」

と、言った。「しない後悔よりもする後悔」この言葉が、私の心に響いた。気になって、辞書で意味を調べると、

「行動しなかったことに対する後悔よりも、恐れや不安

に立ち向かい、自分自身の成長や可能性を広げるために行動する方が良いということ」と出てきた。まさにこれは、今の私への最高のアドバイスだと思った。そして、私は恐れや恐怖に立ち向かうという「挑戦」をしていないから、後悔ばかりしているということに気づき、

「次の話し合いのときは、周りの空気や、手を挙げている人数に関係なく、自分の意見に手を挙げよう」と、決心した。

そして、1週間後の委員会。また、多数決があった。

①、②案のうち①案が良いと思った。しかし、「①案に手を挙げるのが私だけかもしれない」「②案の方が、人数が多そうだったら、②案に手を挙げようかな」そんな思いがジワジワと出てきた。変わらなくて、いけない思いながらも、変わることに恐怖を感じ、困っていると、あの先輩と目が合った。「しない後悔よりもする後悔」この言葉を思い出した。心細かった私を勇気づけてくれた。

「①の案が良い人思う人。挙手して下さい。」

「はい。」

①に手を挙げられた。挙げた瞬間、周りの空気や、挙げた人数よりも「自分の意見を発表できた」という事実が、ただただ嬉しかった。そして、あの言葉を教えてくれた先輩に心から感謝した。

周りの人からは単純に見えるかもしれない私の「苦手」なこと。しかし、ある先輩の言葉をきっかけに挑戦し、自信を持つことが出来た。その「苦手」は、今では「強み」になるほど、成長することができ、自分の可能性が広がった。この体験を通して、挑戦することの大切さ、人と人との関わり、言葉の影響力など、これからの社会を生きていく上で大事なことを改めて学んだ。

「しない後悔よりもする後悔」

先輩から教えてもらったこの言葉を胸に、これから色々なことに挑戦したいと思った。そして、この言葉をバトンに、誰かを一押しできる存在になりたいと思った。

相互尊重

慶應義塾普通部 2年 ^{きむら}木村 ^{しゅんすけ}俊祐

今では街の至る所にある多目的トイレ。僕が物心ついた頃には近所の公園に設置されていた。しかし、そんな多目的トイレだが、25年以上前には無かったそうだ。ものすごい速度で社会に浸透させた「多様性」や「差別解消」。これは、年々改善が進んでおり、より色々な人が暮らしやすい社会になってきている。では果たしてその全てが正解であり本来あるべき姿なのだろうか。ここでは、多様性の問題点や過度な差別解消について指摘したいと思う。

まず、現代には多様性を履き違えている人がいるということだ。例えば、礼儀がなっていない人だ。僕はある運動部に所属しているのだが、同級生の中には先輩に対して敬語を使っておらず、いわゆる「タメ口」で話している人がいる。最近では厳しい上下関係を批判する声もあるが、僕は必ずしも上下関係をなくすべきだとは思わない。なぜなら、組織としてのまとまりを失うからである。そこで、上の者と下の者とでバランスをとる必要があると思う。一例として、鎌倉幕府の繁栄を支えた「御恩と奉公の関係」を挙げたい。簡単に言うと、家来が將軍のために戦い、將軍はその感謝を形として伝えるために土地を家来に渡したということだ。ここでは、お互いに尊重し合い、信頼関係を築くことが重要になる。上の者は下の者を尊重し理解してあげることで、下の者は上の者を尊敬でき、行動をしたいと思うだろう。つまり、上下関係というものは必要なことであり、それを維持していくにはお互いを尊重し合うことで自然と上の者に従うようになり、多様性を濫用した行為は減っていくのだと思う。

次に、過度な差別解消が最近増えていることについて言及したい。皆さんは「逆差別」という言葉を知っているだろうか。これは、マイノリティなどの社会的弱者への過度な優遇によりそれ以外の人が逆に不利益になる、ということだ。最近国内で話題になっている例としては、大学受験の際に女性に優先的に入学させる、「女性枠」などの制度であり、理工系の学部などで増えているそうだ。僕は、あまり好意的な印象をもたなかった。なぜなら、自分の性別は関係ないが、過度になってしまうとやはり男性に対しての逆差別になりかねないからである。確かに、理系の道に進んだ女性のことを「リケジョ」と

呼ぶなど、このような学部に入る女性は少ないのは事実ではある。だからこそ、「結果」ではなく「機会」を平等にし、世間が性別と学部を結びつけるような雰囲気を作ってはいけないのだ。そのためには、同様にどの学部に行く人もお互いに尊重し合うことが大切ではないのだろうか。

また、多様性の間違った認識は時に文化や個性を破壊する恐れもあるのだ。一昨年、カタールでサッカーのワールドカップが行われたのだが、日本でもかなり盛り上がった記憶がある。しかし当時、世界中のLGBTQ+の人々がそれに猛反発をしていたのはご存知だろうか。実は、カタールではLGBTQ+の人が結婚などをすると最長7年の禁固刑に処されるという法律があるのだ。確かに、これは多様性が広く認められるようになった世界においては時代遅れなものである。だが、重要なのは、カタールの文化を世界の型にはめることなく、やはりお互いが理解し尊重し合うことである。哲学系 You tuber の「rの住人ピエロ」さんはこう語る。「少数派が本当に求めているのは物質とか基準とかではなく、理解が欲しいですね」と。

このように、様々な意見が飛び交うこの社会に必要なことは、上の立場の人や大多数の人が下の立場の人や少数派をある一つの基準に落とし込むことではなく、お互いの意見を尊重し合い、気遣うことが、この世界を持続可能にし、差別や多様性に関する問題を根本的に解決するために必要なことであると思う。皆さんももし気に食わないことがあっても、まずは相手を、納得はできなくても理解してあげることから始めてみませんか。

「笑顔」のパワー

神奈川県立相模原中等教育学校 3年 ^{すずき}鈴木 ^{もも}萌々

笑顔が素敵な人。いつも無表情な人。喜怒哀楽が激しい人。この世には一人ひとり個性の違うたくさんの人々が存在する。その中で自然と惹かれていくのは笑顔が素敵な人だろう。「笑顔」は伝染するもの。相手が笑顔でなくても自分から笑いかけることによって、互いの気分が良くなり会話が弾む。私は笑顔でいることを心がけている。それにはいくつか理由がある。

「引っ越すよ。」

突然言われた。それは小学四年生の頃だった。そのとき私は京都に住んでいた。もともと親の仕事の関係で、小さい頃から引っ越しをたくさん経験していたため引っ越し自体は慣れていたが、それでも親友たちと離れるのは嫌だった。小学校に入学する前はまた別のところに住んでいたため、小学一年生の頃は関西弁が分からず、よく泣いていた。そんな私に笑顔で対応してくれて、毎日と言っていいほどたくさん遊んでたくさん思い出を作った親友たち。離れるのがとても辛かった。私が転校するとき、親友が言ってくれた言葉を今もときどき思い出す。

「やさしい笑顔が大好きだよ。」

私はこの言葉を胸に、これから過ごす転校先の教室に足を踏み入れた。入った瞬間、自然と顔がこわばった。緊張。焦り。不安。さまざまな思いが冷や汗となって全身からあふれ出す。そんなとき、あの言葉を思い出した。笑顔になろう。笑顔でいよう。それだけで気分がとても楽になった。親友の言葉に救われた。笑顔があんなにも心を楽にしてくれるなんて。それから私は新しい場所で、新しい友達と充実した毎日を過ごすことができた。だから私は笑顔でいたい。そう思ったのだ。

最近、「笑うこと」が心身の健康に効果的だということが医学的にも実証されつつある。例えば、プロ野球選手の写真を調べたところ、笑顔が少ない選手の平均寿命が七二・九歳に対して、笑顔が多い選手は約八〇歳だったというウェイン大学の研究結果がある。笑うことで、平均寿命が約七歳も伸びるのである。この他にも笑顔がもたらす効果はたくさんある。まずは「ストレスを解消することができる」ということ。笑顔になることで脳内には、幸せホルモンといわれるセロトニンや痛みを抑え気分が高揚する作用のあるエンドルフィンが分泌され、ストレスが解消されると言われている。次に「脳の働き

を活発にする」ということ。ストレスなどで脳が緊張状態になると酸素が不足して脳の働きが鈍くなる。しかし笑っている時は脳がリラックスして多くの酸素を取り込むことができ、働きが活発になる。最後に「免疫力をアップする」ということ。笑うことでナチュラルキラー細胞という免疫細胞を活性化させ、免疫力をアップすることができる。これによって免疫細胞が増加し、緊張や抑うつ・疲労などの心身の状態が改善したという報告もある。また、健康効果とは少し違うが「パフォーマンスが上がる」と言われていて、笑顔の効果はアスリートにも注目されている。ピンチの時には身体が緊張しがちだが、笑顔になることで心身を落ち着かせることができる。このように「笑顔」はたくさんの効果をもたらすのだ。

フランスの哲学者で『幸福論』の著者アランは、「幸福だから笑うのではない。笑うから幸福なのだ」という言葉を残している。誰かに「笑って」と言われて心の底から笑える人は数少ないだろう。実は心の底から笑ってなくても、笑顔を作るだけで幸福感が得られることが分かっている。「辛いときこそ笑うんだ」という言葉をよく聞く。しかし辛いときに笑うことはとても難しいと思う。そういうときこそ、まずは笑顔を作ることから始めてほしい。辛いときでも笑顔でいられるくらいの気持ちの余裕があれば、きっといいこともあると思う。無理して笑わなくても大丈夫。少しずつ笑顔でいる時間を増やすことで自然に笑みがこぼれるようになったり楽しいと思えたりするときに来るはずだ。私はこれからも「笑顔」を心がけていく。なぜなら「笑顔」のパワーは半端ないから。

「考える人」は、動かない

神奈川県立相模原中等教育学校 3年 ^{たきざわ}滝澤 ^{さほ}咲歩

信号のない横断歩道を渡ろうとすると、すぐに車が止まってくれる。迷子になって道を尋ねれば、快く教えてもらえる。歩いていて何か物を落としても、たとえそのことに気付かなくても、後ろを歩く人が拾ってくれる。今、私たちが生きているのは、そんな、優しさに満ちた世界だ。

しかし、それ故、私たちは人任せになってしまっているのではないだろうか。他の人が行動するのを、我関せずと眺めてはいないだろうか。

先日、私は駅のホームで電車が来るのを待っていた。電車が到着する旨のアナウンスが流れた時、「誰か!」と悲鳴が聞こえた。私には何が起こったのか見えなかった。だが、その声色から、助けを求めているのは火を見るよりも明かだった。

これほど遠くまで届くような叫び声を発することなど、そうそうないからだろう。私の周りにいた人は一人残らず、「何事か」と声のした方へ目を向けた。それなのに、誰一人としてその場を動かなかったのだ。私から見える範囲にいた数十人、その皆が皆、何食わぬ顔をしてやって来た電車に乗り込んでいた。

既に誰かが助けているだろうから、自分が動いたって無駄だ。下手したら、ただの野次馬になりかねない。もしかしたら、そんなふうに考えていたのかもしれない。わからなくはない。しかし、それが「他人を当てにした無責任な考え方」に思ってしまうのは、私だけだろうか。「考える人」は一步も動かない。

あの悲鳴は、ただの傍観者にとって「他人事」でしかなかったのだ。道を渡る時に車が止まってくれるのとは違い、相手の顔が見えない。そのせいで、自分とは関係がないように感じられるのだ。「誰かが何とかするだろう」と期待して、その「誰か」が他ならぬ自分自身であるべきだという可能性を、これっぽっちも考えていない。

要するに、当事者意識がない。相手の視点に立とうとしない。だから、自分一人で行動を起こしたところで何も変わらないと思っている。

でも、何も変わらないなんて、そんなことはない。当事者意識を持ち、相手の目線から考えるだけで、変わることがある。

障がい者や高齢者が目の前に立っているのを尻目に、席に座ってスマホに視線を注いでいる人がいる。電車の中で、しばしば、見かける。ときおり、そんな光景が優先席で見られたりもする。そして恐らく、彼らは自分の前に立つ人の存在に気付いているのだ。

席を譲るべきだとはわかっているけれど、面倒くさい。断られるのが怖い。自分も疲れているのだから、座っていたい。そんな声が聞こえてくるようだ。

こんな時、「他の人が譲らないかな」なんて考えはすぐに捨てて、当事者意識を持つといい。相手の目線になってみればいい。きっと、自分でも驚くほどあっさりと、席を譲ることができるだろう。そして誰かの笑顔が一つ増える。

もし断られたら、あの人は座りたくなかったんだな、と開き直っていいと思う。相手も当事者意識を持っているとは限らないのだから。

小さい頃から「困っている人がいたら助けましょう」と散々言われてきた私たちは、だけど、「当事者意識」の「と」の字すら、教わった覚えがない。お年寄りや障がい者には席を譲りなさい、車椅子利用者が段差に困っていたら手伝いなさい。そうやってうわべだけしか学んでこなかったけれど、今になってようやく、本当に大切なことがわかった。

当事者意識を持つ、つまり、相手の目線に立つこと。そんな些細なことで、世界は変わる。変えられる。たとえ一歩ずつだろうとも、いつの間にか千里の道を進んでいるはずだ。

奨励賞（神奈川県立青少年センター館長賞）

魔法修得のススメ

横浜市立義務教育学校霧が丘学園 9年 ^{たけだ}竹田 ^{しおり}汐李

「ありがとうは人を笑顔にする魔法の言葉だ」——これは、多くの人にとって聞き覚えのある言葉なのではないでしょうか。誰しも人から感謝されて、程度は違えど満たされた気分になった経験はあるはずです。確かにこれは間違いではないと思います。しかし、私はこの言葉の、あたかも「ありがとう」の一言は、「誰でも」、「最初から」、非常に「簡単に」伝えられるかのような言い方に疑問を覚えます。なぜなら、感謝の言葉が魔法なのだとなれば、それは「修行」をしなければ使いこなすことができないからです。そこで、「感謝の言葉は魔法」だという事を前提に、そのような比喩的表現と感謝の伝え方について、自分なりに考察してみました。

私は「ありがとう」の一言を伝えるには「修行」が必要だと述べましたが、その「修行」を自分からしよう、つまり積極的に感謝を伝えていこう、という意識を強く持っている人は、多くはないと感じています。しかし、私達は日常的に様々な場面で感謝を表します。例えば、人から親切にしてもらった時や、褒めてもらった時。人が良い行いをしているのを見た時に、称賛の意味を含めて。そのような時には、「ありがとう」は割と簡単に出てくることがありますが、それは何故でしょうか。私が考えた理由は二つあります。一つは、その感謝は魔法ではない、即ち人に笑顔を与える力を持っていないから、というものです。そしてもう一つ、その人は数多の「修行」をこなしてきたベテランであるから、というものもあります。だとすれば、その人は尊敬すべき人だと思います。前者の場合は、もしかすると「修行」が必要なのかもしれません。

さて、その「修行」ですが、私は以前に、それについて考えさせられる経験をしたことがあります。それは、バスに乗っていた時でした。乗客の一人が降車する時に運転手の方に、

「ありがとうございました。」

と言っているところを見かけたのです。その乗客の一言を傍から聞いていた私でさえ何となく良い気分になったのだから、運転手の方の心もきっと暖まったはずです。その後、私も同じことを言ってみようと試みましたが、一言が、喉につかえて出てこなかったことを覚えています。自分の未熟さを痛感するとともに、数刻前の、どこ

の誰とも知れない人への尊敬の念は、否定できませんでした。

堂々と感謝を声にできるあの人は、きっとたくさん「修行」を重ねてきたのだと思いますが、具体的には一体どうやって「修行」を積みばよいのでしょうか。ここでまた魔法の話に戻ります。小説などで目にする魔法にも、空を飛ぶものや薬を作るもの、時空を操るものなど様々な種類があります。そして物語の登場人物たちは、そのような魔法を、それぞれの方法で、思いを含めて練習し、自分のものとしします。私は思うのです。感謝を伝えることも、それと似ているのだと。様々な場面で、それぞれの相手に「伝える」という意識を持って。相手の気持ちを惟みて、受け取った末に出てきた「ありがとう」が伝わり、相手の心に届く。その時初めて嘘偽りのない、心からの感謝というものが成立するのではないのでしょうか。ここで、相手の心も自分の心も暖め、そこに笑顔が生まれる幸福感。それを作るもととなった「ありがとう」を、私達は「魔法」と呼ぶのだと思います。それは相手がいないと成立しないけれど、紛れもなく自分自身の「修行」で生み出されたものです。だからその先も、自身の自己肯定感を上げ、自分を陰で優しく、確かな強さで支えてくれるのではないのでしょうか。

もし、この地球が、感謝の「魔法」を使いこなす人で溢れたなら、この世界は、もう少し平和になるかもしれません。人を深く思いやること、誰にでも心を込めて感謝を「伝える」こと。そしてそれを続けること。今一度、自分の感謝の伝え方を振り返ってみて、課題を感じたのなら、感謝の「修行」に励んでみることを提案します。あなたも今日から、「魔法修得」を目指し、世界を変えていきませんか。

最後まで読んでくださり、

「ありがとうございました。」

奨励賞（神奈川県立青少年センター館長賞）

今、自分が見ている景色

茅ヶ崎市立松浪中学校 2年 ^{た な}多那 ^{は る と}晴都

朝、目が覚めた。僕は生きてる。今日も始まるんだ。

何を当たり前なことを言ってるんだと思うかもしれない。でも、当たり前なことではないんだ。目が覚めることや、当たり前の風景、日常があること、それは特別なことなんだ。

僕が小学6年生の時に2人の祖父が亡くなった。すごく近くにいたのにそれはあっけなくおとずれた。本当にあっけなく……。会おうと思ったらいつでも会えた。話そうと思ったらいつでも話せたはずなのに。

入院してしまっただけに会った時には目を閉じて動かない祖父だった。ただ寝ているだけにも見えたけどもう二度と目を開けることはなかった。頑張ったな、偉かったなと言って頭を撫でてくれた祖父の温かかった手。時間とともに冷たくなった。それは怖いくらいに冷たかった。当たり前だけど手を握り返してくれることもなかった。理解しているつもりでも理解出来ない自分がいた。

自分に見えるこの世界を祖父はもう見る事が出来ないんだ。それでも変わりなく続いていく日常があることが不思議で仕方がなかった。

コロナ禍で入院した祖父達。面会に行くことさえも許されず会えないまま亡くなってしまったことを母は今でも心を痛めている。コロナという得体のしれないものに悔しさを覚えるという。ああすれば良かった、こうすれば良かったと後悔をよく口にしている。

人が亡くなると火葬されることは知っていた。でも、実際に見るのは初めてだった。骨になった祖父と対面し、それが祖父だと言われてもあまりの衝撃に言葉が出ず受け入れることが出来なかった。小さな箱に収まってしまう現実に言葉を失った。

人は誰でもいつかはこの世を去る。勿論、僕だって。まだ想像も出来ないけれど。ただ言えることは命は一つしかない一点物だということだ。そして、限りがあるということだ。この世に同じ命は存在しない。どの命も特別で代わりのものなんてないんだ。

僕がしているゲームのようにリセットしたらまた最初から始められたらいいけれど絶対に無理なんだ。だから命は何より大切なもの。大事な大事な命のはずなのにテレビや新聞などで事故や事件のニュースを聞かない日はない。自ら命を絶つ人もいる。79年前には長崎に原爆が

落とされ一瞬にして多くの命を奪った。そして、今もお苦しんでいる人もいる。いまだに戦争が起きて今もどこかで誰かが命を落としている。そんなニュースを聞くたびに悲しい気持ちになる。

生きることは楽しいことばかりじゃないと思う。辛いこと、苦しいこと、悲しいことも多いと思う。僕は苦手なことやこだわりが強く、日常生活でうまくいかないことも多い。

でも、僕は言いたい。僕は僕でいいじゃないか。僕は僕なんだから。みんなと違うんだから。僕は生きる。僕は僕らしく生きる。みんな違うんだからみんな大事。どの命もかけがえのない命。自分の命と同様に人の命も尊重しなければいけない。

祖母は今、入院している。昔から病氣と闘って頑張っている。毎日、命を大事に大事に守っている。母は毎日、面会に行っている。コロナが5類になり面会が許されたが制限があり、15分の面会だ。それでも祖母に会えることが嬉しいと言う。僕は年齢制限で行くことが出来ないから手紙や動画を母に託す。元気になって欲しいと願いを込めて。

明日、また朝になり、目が覚めたら当たり前じゃないことに感謝しようと思う。

高校野球やオリンピックで選手宣誓を耳にした。僕は誓う。

「宣誓、僕は命の尽きるまで正々堂々、悔いのないように一生懸命生きることを誓います。」

「吃音症と私」

山北町立山北中学校 3年 馬場 紗季^{ばば さき}

私は、吃音症という障害を持っています。吃音症とは、話し出すときに言葉がつまったり、言葉がすらすらと出てこない発話障害の一つです。

吃音症と戦っている人は日本に百二十万人、百人に一人の割合でいるといわれています。

吃音は二〜三歳の幼児期に発症し、多くの人は自然に治癒していきます。しかし、二〜三割の人は症状が固定してしまい吃音とともに過ごしていかなければなりません。

世の中には、吃音症を笑われたり、からかわれたりしている人がおり、生きづらい思いをしている人がたくさんいます。

私は、六歳のときに吃音を発症しました。吃音症という障害をもっているので学校生活や私生活でも困り、悩んでしまうこともたくさんありました。

授業で発表するときなどはもちろん、友だちと話すとき、家族で話すときでさえ上手く言葉が出てこない自分が本当に恥ずかしく、自分自身が大嫌いでした。

小学生のとき仲の良い一人の子と話をしていました。別の子が近づいてきた瞬間、吃音症の症状がでてしまいました。

「なにそのしゃべり方。変なの。」

その子は私のしゃべり方を真似してからかってきました。

その子はいじめるとかではなく軽い感じで言ったようでした。しかし、私は「私って変なんだ、」「他の子とは違うんだ」と思い、話をすることが減っていきました。

口数が減り、友だちと話すことも減り、とうとう学校を休むようになってしまいました。

そんなとき、父や先生が紹介してくれたのが「ことばの教室」という場所です。

「ことばの教室」とは、発話や発音、言葉を使ったコミュニケーションに悩みがある子が通う場所です。

そのときの私にとって「ことばの教室」は唯一、自分の想いに素直になれる場所でした。

私は、三年間通っていたので、三人の先生にお世話になりました。どの先生も私が話し終えるまで待ってくださり、過ごしやすい空間を作ってくださる最高の先生たちでした。

そこでは吃音症についても詳しく教えていただきました。その中で心に残っていることが三つあります。

一つ目は、吃音は自分がもっている個性だということ。

二つ目は、吃音は恥ずかしいことではないということ。

三つ目は、吃音症で悩んでいる人は自分だけではないということ。

この三つを教わって、吃音症に対する悩みがゼロになった訳ではないのですが、少し気持ちが楽になったことを覚えています。

「ことばの教室」では年に一回ほど吃音症をもっているながら社会で活躍している人と話す機会がありました。

吃音症をもっているながらも、学校の先生をやっていたり、接客業のアルバイトをしていたり様々な仕事をしている人と話すことができました。私にとっては驚くことばかりでした。

「吃音があるからってできないことはないんだよ。なんなら他の人と別のものをもっているんだよ。」

私にはなんでそんなに前向きにいられるのかわかりませんでした。しかし、別れ際に言われた言葉に、私は涙が止まりませんでした。「吃音は自分しだいどんな形にもなる。形を変えるかは自分しだいだよ。」

今までの私は「吃音だから」と吃音症のせいにしていました。しかし、本当に自分を悩ませているものは、自分自身なのだと気づかされたのです。

私は将来、吃音症がより多くの人に理解してもらえ活動に取り組みたいと思います。吃音症をもっている差別されず、過ごしやすい、生きやすい社会を作りたいと思います。

私の思い描く社会の形を目指して。

奨励賞（神奈川県立青少年センター館長賞）

努力の証明書

伊勢原市立中沢中学校 3年 福澤^{ふくざわ} 彩花^{あやか}

中学二年生の冬。新体操の全国大会で、自然と涙が流れた。

「そんなわけない。…でも。」

選手全員が演技を終え、結果が分かってからも、しばらくの間信じられなかった。しかしその後手渡されたそれには、確かに自分の名前が記されている。それはまるで、八年間続けてきた努力の、証明書のようなものだ。

初めて大会を経験したのは、小学一年生の時。そこで良い結果を残せなかった私は、悔しくてひたすら練習を重ね、次の年で全国大会への切符を勝ち取った。それから毎年のように出場し続けたが、どうしても全国の大舞台では、力を出し切れなかった。

だからだろうか。私は、自分に自信を持ってないことが多いように感じる。勇気を出すことも難しい。何かうまくできたことがあって、みんなに褒められたとしても、「そんなにすごいよ」と言ってしまう。もはや癖のようなものだ。そのため、あまり心の底から笑い合ったことが少ないと思う。周りにもっとすごい人があることを、毎年この目で見えてきたから。自信に満ちあふれた笑顔で踊っている人たちを、たくさん知っているから。

だからこそ、もっと上へ行きたい。気持ちの面でも、新体操の技術の面でも。そのために、自分の武器である努力と集中力を活かし、一回一回の練習に真剣に取り組んでいたのだ。しかし、私が出場する部門のジュニアでは、中学生と高校生を一括りにし、同じ演技で勝負をする。自分より長い間やってきていて、理屈上は敵うはずのない相手だ。その相手とどう張り合うかが、一番の課題だった。

対策として、練習時間を今までにないくらい大幅に増やした。土日はもちろん、平日の夜も体育館に通い、出来る限り練習した。その方法が一番だと思っていた。むしろ、そのように追い込むことでしか、技術は身につかないと感じていた。

アザや擦り傷は日常茶飯事。ほとんど毎日体育館に通い詰め、幾度となく踊り込んだ。そうやって十一月の県大会を一位で通過した時には、捻挫を二回も経験するほど、体を酷使していた。

体の痛みは、時に、心の痛みとを感じる事がある。休みたい。でも、休んだらせっかく身についたものが、ハラハラと崩れていくように思う。その葛藤をかいくぐり、ぎりぎりの状態を何度も綱渡りしながら、徐々に上達を

目指していった。

思うようにいかなくても諦めず、気温が五度を下回る体育館でも、ひたすら練習を重ねた。寒さのためか関節が伸びず、喉の乾燥が痛みが変わっていった。それでも、少しでも練習をしない期間があると感覚が戻ってしまうことがあり、心配だった。本来なら、高校進学に向けて本格的に勉強を始めても、全然おかしくない時期だ。しかしその時間さえも、全国大会のために費やした。

大会当日も、出発時間直前まで練習してから現地に向かった。当日のコンディションを確かめておきたかったのもあるが、不安を少しでも取り除き、最後まで戦い抜きたかったからだ。今年こそ、自分史上最高の成績を手に入れるために。

そして気付いた。私はいつの間にか、こんなにも強くなっていたのだと。

会場に空調はついていなかったが、普段から冷え切った体育館で練習していたからだろうか。とくに動きが鈍ったり、指先がかじかんだりすることはなかった。緊張もしておらず、なぜか今回はそれほど大きなミスもなく、やり遂げることができそうな予感がしていた。昨年までは心配でどうしようもなかったのに。少なからず自分に自信がついていたことに、今更ながら驚いた。そして本番では、今までで一番自分らしい演技ができたと思う。

父も母も、褒めてくれた。応援に来てくれていた同級生も、おめでとうと言ってくれた。私は、そこで初めて、本当の意味で自分の実力を信じることができたのだ。

帰り道、夜空を見上げると、地平線の近くに月が浮かんでいた。丸い、大きな赤銅色の月だ。それは、あの膨大な量の練習が実を結び、手に入れた悲願のメダルと、同じ色をしていた。

努力は結果に繋がる。結果は自信に繋がる。私は今回、それを自分自身で証明することができた。しかし、それはきつと、これまで続けてきたからこそ得られたもの。もしどこかで諦めていたら、未だに自信を持てずにいたはずだ。私の実力は、紛れもなく日々の練習の成果であり、努力の結晶と言えるだろう。

結果を出すのは大変だ。だが、それに向けての努力は実力になり、やがて自信に変わる。

もっと色々なことに全力で取り組みたい。

いつか、自信を持って笑い合えるように。

天も地も見つめたなら

平塚市立春日野中学校 3年 ^{まえ}前 あかり

ふと塾の帰りに空を見上げてみると、そこには夕焼けと青空が混ざった、美しい景色が広がっていた。

日々の疲れやストレス、悩みなどから俯き、地面ばかりを見つめていた。しかし、そこには小さな虫が生きていて、もし見ていなければ踏んでしまっていたかもしれない。

そんな経験から私は、先ばかり見ていては、下に注意が向かず、小さなことを見落としてしまう。だが、下ばかり見ていては先にある素晴らしいものに気づけず、小さなことばかりに注意が向き、やがて前へ進めなくなる。と考え、気づかされました。この関係は、時間に置き換えることも出来ます。天と地は未来と過去であると。

私はもう変えられないと知りながらも、過去ばかり考え、辛くなってしまう性格でした。私はそれは短所であると、そう思っていました。ですが、過去を振り返らねば成長出来ない、前へ進めないのだと気づきました。きっかけは、保健室の先生の言葉です。

私は小学生の時にあったトラウマのような出来事を引きずり続けていました。時に思い出し、考え、辛くなってしまう日々。そんな時、腹痛で保健室に行き、このことを保健室の先生に話しました。先生は、

「そこまで考えられるのは凄いこと。その経験から今に活かせば良いんだよ。そうすれば、より大人になれるよ。」

私はこのことをきっかけに、過去を振り返っても良くて、そこから今や未来に同じことを繰り返さないようにすれば良いのだと。原因を見つけて、起こりうる可能性があるものから、その時にどうすれば良いのか事前に考えてみれば良いのだと、理解しました。

このことから、多くの時間を過去を見つめるのに費やすのは悪いことばかりではないのです。確かに、過去ばかり見つめていた今までの私は、ネガティブな考えに至り、辛くなっていました。ですが、そこに足りなかったのは、未来を想像することです。未来にそれを活かすことです。未来を想像するだけで、過去の呪縛を少しでも解くことが出来るのです。

「過去は過去として葬らしめよ、そして新しくよき運命を拓いていけばいいのだ」

志賀直哉の『暗夜行路』からの言葉です。過去を引きずって生きていても、良いことはない。過ぎてしまったことは、どうにもできないもの。大切なのはこれからだ。過去のことは清算し生まれ変わった気持ちで生きていくということです。つまり、私たちは過去を引きずるために過去を見つめるのではなく、未来をより素晴らしいものへとするために見つめるべきなのです。

冒頭でも申し上げた通り、地ばかり見つめるのでもなく、天ばかり見つめるのでもなく、そして、過去だけを見つめるのではなく、未来だけを見つめるのではない。地も天も、過去も未来も見つめたその先に、よりよい今を掴むことが出来るのです。例えるのなら、今までの私は、道にいる虫や石ころ、つまりネガティブな考えによる可能性からの幻覚に怯え、前に進むことが出来ずにその場で蹲り、戻れない後ろの道をただ見つめて後悔していました。しかし、天も地も見つめたならどうでしょうか。道にいる虫や石ころに怯えるのではなく、注意して避けて前に進むことが出来ます。なぜなら、天を見たからです。脳科学的に、見上げると、ポジティブな感情が起りやすくなるそうです。それにより、ネガティブな幻覚を幻覚と認識し、そこからどうすれば良いのか考えられるようになったのです。そして、そこには幻覚だけでなく現実もあります。可能性の中にあった、本当に起きる出来事。それが、天だけを見つめてはいけない理由です。天は素晴らしいものだけを見せてくれます。ですが、それでは避けることも止まることも出来ず、突然躓いてしまいます。だから、天だけを見つめてはいけないのです。

これから私たちには、様々な出来事が待ち受けています。それは、良いことばかりではないでしょう。もし、大きな石が目の前に現れたなら、私たちは後悔するでもなく、現実逃避するでもなく、ただ1つ、これを思い出し、対処すれば良いのです。

「天も地も見つめたなら、素晴らしい今を掴むことができる」

「イメージ」の誤解をなくするには

横浜山手中華学校中学部 3年 牟^む 星田^{せいてん}

「百聞は一見に如かず」とはよく聞くことわざです。「人から百回話を聞いたとしても、一回自分の目で見て確かめたことには及ばない」という意味です。

私は小学生の頃に中国から日本にきました。その影響で、私はよく日中両方のメディアや SNS に注目しています。色々な記事やニュースのコメント欄を見ているうちに、私は「イメージ」の重要性に気づきました。

「イメージ」とは、ある物事について人々が抱く全体的な感じのこと、心の中に思い描くもののことです。

私が日本の SNS で見た日本人が中国に対するイメージは大抵「キタナイ」、「製品は安いけど質が悪い」、「安全管理ができていない」などです。でも、悪いものばかりではありません。中には、「以前から色々なニュースで中国の悪いイメージにつながる内容が、私が実際行った時はそれほど悪いイメージではありませんでした。」という回答です。私はこの回答に賛成です。

なぜなら、私の知っている中国と日本のメディアが報道している中国は全然ちがうからです。

私は、同じように、中国の SNS で中国人が日本にもつイメージを調べてみました。すると、答えは、「アニメ以外特徴がない」「人に同情する気持ちがゼロ」などの悪いイメージの書き込みの比重が大きいと分かりました。でも実際、私は日本に来て、教育を受け、生活してみると、見知らぬおばあさんから善意を受けたり、日本独特の伝統文化「能」や「座禅」を体験してすばらしさを知ったり、中国メディアが掲げるイメージとは全く異なるのです。

では、こうした誤解はどこから生まれたのでしょうか？

それは、私たちが生活する中でよく聞く、「みんなそう言っていたから」「ネットにそう書いてあったから」という根拠のない思いこみからなのではないのでしょうか。SNS などの他人からの一言で悪いイメージができ上がり、それをまた無責任に他人に伝えてしまっているのです。こうしたことをくりかえすことで、根拠のないイメージが定着するのでしょうか。それはとても残念なことです。私たちには日中両方の一部しか見えてないという前提に立つべきです。自分の目で見えない部分がまだたくさんあるという想像力を働かせることが大事なのです。

実は、「百聞は一見に如かず」と言うことわざの後には、まだ「百見は一考に如かず」と続きがあるのです。数多く「見る」だけでなく、自分で「考え」なければいけないという意味です。

私たちは今、誰か知らない他人が書きこんだ情報や言葉をもそのままコピペするように脳内に入れてしまいます。その情報の真偽を確かめもせず、自分では何も考えないまま、悪い情報を拡散させ、誤解を広めてしまうこともあります。私たちが今必要としているのは、行動する前に「もしかして、この情報、このイメージはうそなのではないのか？誰かの無責任な偏見なのではないのか？」と、一度疑うことだと思います。

「イメージ」とは人の考え方に大きく影響を及ぼすものだと思います。そのうえ、イメージは簡単に消えないし、簡単に変えられるものではありません。

私たちが生きる今の社会では、簡単に色々な情報が入り、私たちの知らないうちに「イメージ」が頭の中でできてしまいます。

だからこそ、何でも自分で体験し、自分で物事を学ぶことが大切です。自分で体験すれば、その「イメージ」はただの参考資料になり、私たちは自分自身の観点や自分ならではの「イメージ」を育てることができるでしょう。

中国でも日本でも生活した事がある私だからこそ、イメージに惑わされている人に、事実に基づいた情報を伝え、誤解をなくせるような人になりたいです。

<参考>

第46回令和6年度「中学生の主張 in かながわ」

入賞候補作品一覧（順不同）

テストの問題用紙について	厚木市立睦合中学校 3 年	中野 果歩
プラチナの命	横浜市立上永谷中学校 3 年	斉藤 栞菜
「人間関係で大事なこと」	山北町立山北中学校 3 年	佐藤 心美
「もう後悔をしないために」	山北町立山北中学校 3 年	関 紗伽
クラゲにならない方が良い	茅ヶ崎市立円蔵中学校 2 年	金子 ひより
戦争と私	川崎市立西高津中学校 3 年	村井 杏理
夏休みからの果たし状	平塚市立神明中学校 2 年	田代 優月
当たり前の幸せ	横浜共立学園中学校 3 年	渡辺 麻万
「話すこと」「整理すること」	横浜共立学園中学校 3 年	増川 ふくみ
万端を以て一事を知る	神奈川県立相模原中等教育学校 1 年	谷岡 彩葉
さよなら反抗期	神奈川県立相模原中等教育学校 1 年	木下 悠誠
話し方と伝わり方	横浜市立義務教育学校霧が丘学園 9 年	池内 紗衣良
不登校と戦う	横浜市立義務教育学校霧が丘学園 9 年	鈴木 梨音
凶器を使ってチャンスをつかむ	伊勢原市立中沢中学校 3 年	濱口 千帆
夢	真鶴町立真鶴中学校 2 年	関浦 歩花
だから私は勉強する	相模原市立新町中学校 3 年	藤生 奈那

<参考>「少年の主張全国大会」内閣総理大臣賞

「一隅を照らす」

宮城県 栗原市立栗原南中学校 3年 ケイバージーバ

「一隅を照らす」という言葉を知っていますか？この言葉は、パキスタンとアフガニスタンで三十五年の間、病気の人達や貧しい人達のために医療や開拓などの支援活動を行ってきた医師、中村哲さんが好んで使っていた言葉です。

私が中村哲さんのことを知ったのは、小学四年生の頃。「日本人でそんな人がいるなんて……。」「とても勇気のある人だ。」と強い感銘を受けました。

「私も中村さんのようになりたい……。」「困っている人達を救いたい。」

自分には今、何ができるのか、自分はどう生きていくのかを考えることが多くなりました。

私は、アフガニスタン人です。パキスタンの小学校に入学しましたが、父の仕事の関係で、四年生からは、日本で生活しています。

六年前に日本に来たときは、家族みんな日本語が全く話せず、言葉の違いや文化の違いに戸惑いました。

パキスタンの学校では、よく分かっていた勉強が、日本の小学校では、全然ついていくことができず……「日本語が分からないから仕方がないか。」と思う自分と「悔しい。何とか分かるようになりたい。」と思っている自分がいました。

日本語が少し分かるようになり、日本の文化にも慣れてきた頃、始まった中学校生活。

待っていたのは、辛い日々……。テストのためにどれだけ勉強しても分からないことだらけで、負けず嫌いな私は、仲のいい友達にも負けたくなかったので、ストレスが重なり、「もう嫌だ。死んでしまいたい……。」

そう思うことが何度もありました。どうしようもなく泣いたこともあります。

そんな絶望的だった私を助けてくれたのは、友達や先生方でした。周りの人たちが話を聞いてくれたり、おもしろいことを言って笑わせてくれたりして救ってくれました。両親も、いつも応援してくれました。

「私も周りの人を助けてあげられる存在になりたい。」そう思うようになりました。

アフガニスタンには、病院も水もない場所があります。そこで中村さんは、「一隅を照らす」「自分が今いる場所で、自分にできることを一生懸命やる」といった精神で、医師として、人として多くの苦しむ人達を助けてきたのです。

私の将来の夢は、医師です。現在のアフガニスタンでは、女性が学校に通えるのは小学校までで、女性が教育を受け、就職する機会が奪われています。私の親戚も女性は働いていません。私の母は「自分は勉強できなかったから、ジーバにはさせたい。」と、いつも励ましてくれます。アフガニスタンに住む友達は、「平和な国で学校に行けて、勉強できていいね。」と言って毎日泣いています。

日本に来て、辛かったこともありましたが、今は、日本で勉強ができていることが本当に幸せです。日本の国籍を取得し、大学に入って自分の夢を実現させたいと思っています。

家族と話すパシュート語、ウルドゥ語、ヒンディー語、アラビア語、英語、日本語。私が話せる言語です。それを自分の特技として生かしていきたいです。医師になって、母国のアフガニスタンで病気の人達や貧しい人達を助けてあげたいです。私が働くことが、アフガニスタンの女性達の希望につながる。そう信じています。

人間は一人では生きていけません。人から支えてもらい、人を支えて生きています。私を支えてくれた友達や先生、そして両親に恩返しをするために、「一隅を照らす」パシュート語で (کړئ روښانه کونج يو)。まずは、今の自分にできることを、やり続け、やり遂げられる人になりたいです。いつか、日本とアフガニスタンを結ぶ架け橋になるために。

実施概要

1 目的

中学生が、日常生活の中で考えていることを作文にして発表することを通して、広い視野と柔軟な発想や創造性とともに、物事を論理的に考える力や自らの主張を正しく理解してもらう力を身につけることを目的とする。

2 主催

神奈川県立青少年センター 独立行政法人国立青少年教育振興機構 神奈川県

3 後援

神奈川県教育委員会 神奈川新聞社 **NHK** 横浜放送局 **tvk**
神奈川県青少年育成アドバイザー連絡協議会

4 対象

神奈川県内在住または在学の中学生（国籍は問わないが、日本語で発表できること）

5 応募期間

令和6年6月4日（月）～9月9日（月）

6 発表大会

- （1）期日 令和6年9月29日（日）14:00～16:15
- （2）会場 県立青少年センター スタジオ HIKARI
- （3）視聴者 89名
- （4）内容 作文発表（優秀賞以上の7名） アトラクション 表彰

7 選考

- （1）作文審査（事前審査）
審査会において作文発表大会出場者と奨励賞受賞作文を決定
- （2）発表審査
作文発表大会において、最優秀賞と各優秀賞を決定
（審査員）

神奈川新聞社報道部記者兼論説委員	成田 洋樹
神奈川県公立中学校長会（小田原市立城南中学校校長）	加藤 直樹
神奈川県青少年育成アドバイザー連絡協議会会長	佐藤 節子
教育局支援部子ども教育支援課専任主幹	山下 順也
神奈川県立青少年センター副館長	柁 晴美

8 表彰

- | | |
|-------------------------------|-----|
| ・最優秀賞（神奈川県知事賞） | 1名 |
| ・優秀賞（神奈川県教育長賞） | 1名 |
| ・優秀賞（神奈川県福祉子どもみらい局長賞） | 1名 |
| ・優秀賞（神奈川新聞社賞） | 1名 |
| ・優秀賞（NHK横浜放送局長賞） | 1名 |
| ・優秀賞（tvkかながわMIRAI賞） | 1名 |
| ・優秀賞（神奈川県青少年育成アドバイザー連絡協議会会長賞） | 1名 |
| ・奨励賞（神奈川県立青少年センター館長賞） | 10名 |

9 応募状況

- ・応募者総数 763名
- ・参加学校数 31校

令和6年度「中学生の主張 in かながわ」記録集

編集・発行

神奈川県立青少年センター

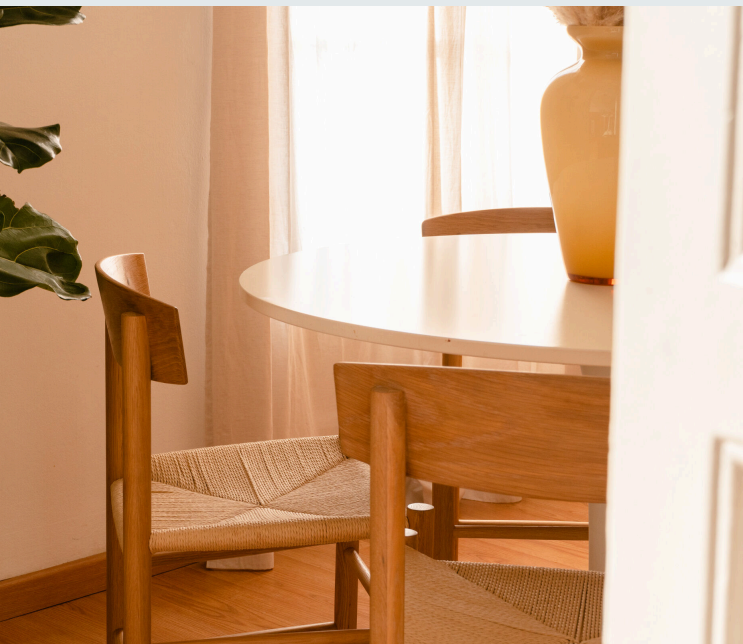
〒220-0044

横浜市西区紅葉ヶ丘9-1

電話 045-263-4466

ファクシミリ 045-242-8190

本記録集の無断複製、転載等は禁止いたします。



神奈川県
神奈川県立青少年センター